

## 成果と課題

### 成果

#### (1) 自分の考えをもつ

書くことについての目的意識や相手意識をもたせることで自分の考えをもつことができるようになった。また、経験したことを言語化させることで自分の考えを整理し、表現することができるようになった。

#### (2) 主体的に表現する

経験をもとにしたことを「書く」ことは、主体的に表現することにつながった。また、感謝の気持ちの手紙など相手をはっきりさせることで相手に合った文体で主体的に書くことができるようになった。

#### (3) その他

単元の始めに録画動画や写真を見せることで動機付けになり、経験を思い出しやすくなり、「書く」意欲を高めることができた。また、友達に読んでもらうことで、児童同士の評価が生まれ、「書く」意欲につながった。

### 課題

#### (1) 自分の考えをもつ。

何を書いたらよいか分からない児童もいるので題材選びの支援をしていく。

#### (2) 主体的に表現する。

「言いたい」「話したい」気持ちを大切に、定型文や構成力の向上を課題にワークシート等の工夫が必要であった。

#### (3) その他

書くことの指導方法として学校内で統一した指導をしていく必要があった。また国語の時間だけでなく、継続的に横断的に指導していく。

## おわりに

副校長 河村 康彦

昨年度までの国語科の「読むこと」の研究の成果を土台として、今年度は「書くこと」に発展的に継承したいという教職員の熱意があふれる一年間でした。

「書くこと」で、一定の成果を出すためには、児童の文章や課題への理解ができていくことが求められます。また、理解できていても、表現する段階での個に応じた対応が必要になります。そのような中、教職員間で意見を出し合いながら、児童が主体的・対話的な学習の中から、課題解決をするための指導方法を追求していきました。

最後になりましたが、本校の研究について、温かいご指導、ご助言を下さいました瑞穂町教育委員会教育部教育指導課長 小林洋之先生、指導主事 大岡佑太先生、瑞穂町教育委員会の皆様に、心からお礼を申し上げますとともに、今後とも一層のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年度 瑞穂町校内研究

# 自分の考えをもち、主体的に 表現することができる児童の育成

～「書くこと」を通して～



瑞穂町立瑞穂第一小学校

# 校長あいさつ

校長 石坂 隆文

昨年度（令和4年度）まで校内研究において、国語科の「読むこと」について校内研究を推進し、授業改善に努めてまいりました。今年度（令和5年度）は、昨年度までの研究の積み重ねのもと、書くことを通して児童の思考力、判断力、表現力を高めていきたいと考えました。研究主題を「自分の考えをもち、主体的に表現することができる児童の育成」とし、国語科の「書くこと」領域を中心に校内研究を推進してまいりました。

研究を始めるにあたって、児童の書くことに対する思いや学校紹介というテーマについて、書いた内容の実態調査等を行い、児童理解を深めました。研究を進めていく中で、相手意識や目的意識をもたせることの大切さ、題材選びや構成に関する指導等、教材研究のポイントが少しずつ明確になってきました。研究の途ではありますが、ここで令和5年度の研究の成果を本冊子にまとめ、改めて「国語好き」の児童が増えることを目指し、授業改善を進めていく所存です。

結びになりますが、今年度本校の研究に対し親身になって適切なご指導、ご助言をいただきました瑞穂町教育委員会教育部教育指導課長小林洋之先生、指導主事大岡佑太先生に感謝申し上げます。また、本校の校内研究に常日頃から温かくご指導とご支援、ご協力をいただきました瑞穂町教育委員会の皆様に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

## ご指導いただいた先生

瑞穂町教育委員会教育部教育指導課 指導課長  
小林 洋之 先生

瑞穂町教育委員会教育部教育指導課 指導主事  
大岡 佑太 先生

## 研究に携わった職員

校長 石坂 隆文      副校長 河村 康彦      ◎研究主任      ○研究推進委員

低学年分科会	中学年分科会	高学年分科会	たんぽぽ分科会
石川 友希	高松 大輔	北原 康弘	浦川 淳子
○大竹 玲奈	對島 志織	酒井恵理佳	山本 明子
青山 祐二	○伊東 克	寺側 厚雅	○山本 れい
○松村 園美	眞田 弘之	松本加代子	吉原 拓実
新井真里南	黒澤 健二	◎長谷部雄大	友松 摩弥
松本 莉歩	村田由香里	○篠田 能亜	池田美穂子
鈴木宏二郎		○天野 奈々	

## 主題

自分の考えをもち、主体的に表現することができる児童の育成  
～「書くこと」を通して～

## 主題設定の理由と研究仮説

### 児童の実態

- 語彙や漢字の習得に個人差がある
- 間違いが見付けられない
- 言葉で言えても書けない児童
- 「書く」ことに苦手意識のある児童

自分の考え 主体的に書く の力を育成したい

- ① 語句や文の指導を丁寧に行う。
- ② 「書く」こと目的（相手など）をはっきりさせた授業を展開する。
- ③ 継続的に「書く」こと環境を充実させる。

自分の考えをもち、主体的に表現する児童の育成がなされるであろう

## 研究の内容

### 自分の考えをもつために

- 複数の題材の例示
- 経験や興味からの取り組み
- 経験したことを言語化
- 文章の構成の視覚化（色分け）

### 主体的に書くために

- 単元を通じた「書く」活動の充実
- 「書く」活動の目的の明確化（感謝の手紙／行事のおすすめ／図鑑作成／作品の紹介）

# 研究の概要

## 研究構想図

### 国語科における児童の実態

低学年	中学年	高学年	たんぽぽ
<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケートの結果から国語が好きな児童は8割を超える。</li> <li>語彙を正しく理解していない児童がいる。正しく書き表すのが苦手である。</li> <li>見直しても間違いが見付けられない。見直しを身に付けさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケートの結果から国語が好きな児童は8割を超える。その反面4割弱の児童は、書くことは好きではないと答えている。</li> <li>文を書く際に漢字や語彙の習得に個人差があるため、内容の理解にも差が出ている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケートの結果から6割弱と半数以上の児童が国語が好きと答えた。</li> <li>「書く」の学習では、苦手意識をもち、難しいと感じている児童が少なくない。</li> <li>言葉で話せても書けない児童がいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケートの結果から国語が好きな児童は6割を超える。</li> <li>文字を書くことが困難な児童、知っている文字がいくつかある児童、単語を読める児童、簡単な漢字を書ける児童まで大きな実態差がある。</li> <li>表現方法の手段の一つとして、文を書く力を身に付けさせたい。</li> </ul>

### 研究テーマ

自分の考えをもち、主体的に表現することができる児童の育成  
～「書くこと」を通して～

### 目指す児童像

低学年	中学年	高学年	たんぽぽ	
①身近なことを書き表す語彙が正しく理解できる児童。	①様子や行動、気持ちや性格を書き表す語彙が理解できる児童。	①思考に関わる語句を理解し、語彙を豊かにすることができる児童。	①身近なものを書き表す語彙が理解できる児童。	①身近なことや様子や気持ちを書き表す語彙が理解できる児童。
②主体的に書くことを見付け事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にすることができる児童。	②主体的に書くことを選び、集めた材料を比較して、伝えたいことを明確にすることができる児童。	②主体的に感じたことや考えたことなどから書くことを選んで、伝えたいことを明確にすることができる児童。	②主体的に書くことを見つけ、伝えたいことを明確にすることができる児童。	②主体的に書くことを見つけ事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にできる児童。
③自分で経験したことを記録したり書いたりすることができる児童。	③自分で経験したことを生かして相手を意識しながら伝えたいことを書くことができる児童。	③事象を説明したり意見を述べたりするなど、考えたことや伝えたいことを書くことができる児童。	③簡単な語句や短い文を平仮名で書くことができる児童。	③自分で経験したことを記録したり書いたりすることができる児童。

#### 低学年

- ①ワークシートや付箋の活用
- ②単元の導入の工夫、学習の積み重ね
- ③学校図書室の活用と教師による本の紹介・読み聞かせ

#### 中学年

- ①小グループでの話し合い、意見交換
- ②項目ごとに色分け
- ③ICTの活用  
(行事の練習風景の写真提示)

#### 高学年

- ①グループでの読み合い、共有
- ②経験したことを書かせる教材の工夫
- ③ICTの活用  
(行事の写真、動画の視聴)

#### たんぽぽ

- ①板書の工夫(児童の言葉を板書)
- ②机間指導中の個別指導の充実
- ③ICTの活用  
(学習の様子写真、動画の視聴)

校内研究実施日とOJT

**OJT** 6月21日 15:30~15:45 提案者：対島志織  
『4年生に感謝の会に誘う手紙を書こう』 シミュレーション授業

**研究授業** 6月28日 5校時 3年2組 26名 指導者：対島志織  
『4年生に感謝の会に誘う手紙を書こう』

色分けをしながら構成の組み立てを理解した。

**OJT** 9月15日 15:30~15:45 提案者：北原康弘  
『臨海学校、おすすめします』 シミュレーション授業

**研究授業** 9月20日 5校時 5年1組 22名 指導者：北原康弘  
『臨海学校、おすすめします』

臨海学校で経験した思い出を基に考えた。

**OJT** 10月18日 15:15~15:30 提案者：石川友希  
『せかいで一つのじどう車ずかんをつくろう』 シミュレーション授業

**研究授業** 10月25日 5校時 1年1組 24名 指導者：石川友希  
『せかいで一つのじどう車ずかんをつくろう』

「しごと」と「つくり」に分けてワークシートに書きました。。

**OJT** 10月18日 15:30~15:45 提案者：吉原拓実  
『わたしのだるまをしょうかいします!』 シミュレーション授業

**研究授業** 11月1日 5校時 たんぽぽ 7名 指導者：吉原拓実  
『わたしのだるまをしょうかいします!』

考えたことや思ったことをまず、伝えました。

**OJT** 5月18日 16:30~16:45 提案者：眞田弘之  
『児童が主体的に取り組む学級活動について』

**OJT** 2月22日 15:15~15:45 提案者：石川友希  
『明日にでも使える運動遊びについて』

# 実践報告

## 低学年

### 実践

1年1組 24名 授業者 石川 友希  
単元名「せかいで一つのじどう車ずかんをつくろう」  
教材名「じどう車ずかんをつくろう」 3時/5時

### 成果

児童は、自動車という児童にとって身近な題材を扱ったこと、単元のゴールが明確になっていることで、興味をもって学習に取り組んでいた。ワークシートに、説明に必要なことを書きぬくことで、自動車の種類が変わっても、「しごと」と「つくり」を明確にすることができた。児童同士が互いのワークシートを読み合うことで、誤字脱字に気づくこともでき、自分の文章を読み返す習慣づけにもつながった。



### 課題

自分で選んだ本の中から、必要な事柄（「しごと」や「つくり」について）を見つけられずにいる児童も見られた。また、必要な事柄を見つけられても、自分で文を考えることが苦手な児童も見られた。語彙の意味が分からず、文章につなげられないことも見られるので、日常的に文章に慣れる必要がある。読書活動や日記指導などを引き続き行い、児童の語彙を増やし、文章を読むことで書く活動にもつなげていく必要がある。



## 中学年

### 実践

3年2組 26名 授業者 對島 志織  
単元名「4年生に感謝の会に誘う手紙を書こう」  
教材名「気もちをこめて『来てください』」 4時/6時

### 成果

ソーラン節の練習で交流をした4年生に招待状を送る、という相手意識が明確になっていたこと、実際の経験を基にしていたことから、自分の考えをもつことができた。本時では、3色の短冊を用いることで、段落の作り方や組み立ての順序、内容の詳しさについて気付かせ、より良い文章を書く有効な手立てとなった。



### 課題

一方で、先述のような手立てをしても、書くことが難しい児童への個別の指導や支援については課題が残る。一人一人の実態に合わせた支援方法の検討が必要である。また、自分の感謝が伝わる文章になっているかを児童が自ら推敲することに難しさがあったため、推敲に関する有効な指導・支援についても検討していく必要がある。



## 高学年

### 実践

5年1組 22名 授業者 北原 康弘  
単元名「相手や目的を明確にして、すいせんする文章を書こう」  
教材名「臨海学校、おすすめします」 4時/7時

### 成果

児童が実際に経験した臨海学校を教材として扱うことで、子供たちは自分の考えをもつことができた。書くことが苦手な児童や自分の考えが明確でない児童には、モデル(例)を示すことで参考にしながら書くことができていて効果的であった。導入で臨海学校のビデオを見せたことで、いろいろなことを思い出して学習にスムーズに入ることができた。おすすめする相手を4年生と特定したことで相手意識をもって書くことができた。書いている途中で友達と読み合う活動を取り入れたことで協働的な学びになり、書く意欲につながった。



### 課題

できごとは書けても、理由や根拠を明確にして書くことができていない。また、理由や根拠を示す際の接続詞の使い方も課題である。よく書ける児童でも文と文がうまくつながらない様子が見られた。モデルを示すことで書きやすくなった児童がいる反面、ワンパターンになってしまったり、子供たちの工夫が見られなくなったりして、どこまでモデルを示すのかが難しかった。



## たんぽぽ

### 実践

たんぽぽ学級 7名 授業者 吉原 拓実  
単元名「わたしのだるまをしょうかいます!(みずほ学)」  
教材名「あったらいいな こんなもの」(光村図書) 4時/5時

### 成果

生活単元学習の時間に実際に多摩だるまを作り、その「作ったこと」や「経験したこと」を国語の時間に言語化することで、自分の気持ちや考えを整理し書けるようになってきた。また、教員の板書や手本がなくても、進んで書くことができるようになった。書くこと自体を嫌がる児童はいなく、書くことに対して前向きに捉えられるようになってきた。



### 課題

一方で、書く内容自体が理解できておらず、書くまでに至らないことがある。書くこと自体はできるが、それが自分の表現方法の獲得まで至っていない。児童の「言いたい」「話したい」という気持ちを大切に、表現方法の手段の一つとして「書くこと」も向上できるように、指導・支援していく必要がある。

